「その言葉には気付かなかった。だからいたずらをしたのか。」

特別支援教育では、学習や生活の中で、自分なりの思いや考えをもち、言葉や行動など自分に合った方法で表し、他者に働きかけようとする姿を目指します。国語科の「ごんぎつね」の学習では、ごんが「いいきつね」か「悪いきつね」かを考え、メーターに表しました。自分の考えを表現したり、相手の考えが見えたりしやすくなることで、「僕は悪いきつねだと思うけど、〇〇さんはいいきつねだと思っている。理由を聞きたい。」「だって、一人ぼっちの小ぎつねって書いていたから、寂しいのかもしれないと思った。」「そうか。ごんの行動には理由があるのかもしれない。」と、自然と他者に働きかける姿が見られました。考えを表出し、他者の考えに触れることで、新たに自分なりの思いを見つめ直す姿につながりました。

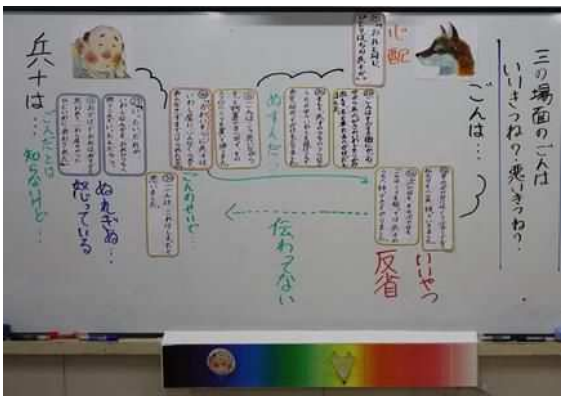
私たちは、自分の意思をもって粘り強く学ぶ力強さと仲間の考えを受け入れながら学んでいく柔軟さを兼ね備えた「しなやかに生きる子ども」を育みます。そのために、他者とつながり合い、“愉しい”を見いだす学びを大切にしていきます。多様な個を認め、高め合いながら学べるように「教材化」「教師の立ち位置」の二つの視点から、子ども一人一人を大切にした授業の在り方を探っていきます。

特別支援教育　５・６年国語科「ごんぎつね」より

視点１　多様な個が生きる教材化

本単元では、読んだ本について『ほんログ』に記録するという言語活動を設定し、そのために『ごんぎつね』を学習する構成にしました。ほんログに記録するために、「場面ごとの様子を理解しながら読みたい。」「登場人物の気持ちを理解したい。」など読む観点を意識する姿が単元を通して見られました。また、ごんの最初と最後の印象のズレから、「ごんはいいきつねか、悪いきつねか。」を場面ごとに考えました。問いをシンプルにし、毎時間同じにしたことで、何について考えながら読むとよいのかが分かり、「一の場面では盗みをしていたから悪いきつねだけど、二の場面は反省しているから少しいいきつね。」など、場面ごとのごんの様子や気持ちの違いについて捉えている姿が見られました。また、メーターを活用したことで、「少しいい。」や「少し悪い寄り。」など、言葉で上手く言い表せない細かい変化も表せる手だてになりました。

視点２　見方・考え方を働かせるための教師の立ち位置



各場面のごんについて、どのように考えているのかを子ども同士も教師も分かるように、お互いのメーターが見えるようにしました。また、教師は、「誰の考えを聞いてみたい。」と問いかけるようにすることで、「自分と違う考えの人に聞いてみたい。」「〇〇さんの方が僕より少しいいきつね寄りに付けている。その理由を聞きたい。」など、友達の考えを聞いたり、自分の考えを話したりしながら、必要感をもって他者とつながり合うことができました。自分の考えを話した子どもに、「どうしてそう思ったの。」と問い返すことで、本文に立ち返り、叙述を基にして場面や登場人物の心情を想像したり、考えたりして話すことができました。自分が着目していなかった叙述に気付いたり、友達が考えたごんの気持ちや様子を聞いたりして、場面についてより具体的に想像できたり、今までと違う捉え方ができたりし、読みを深める姿につながりました。

特別支援教育　２年算数科「プラマイクエスト」より

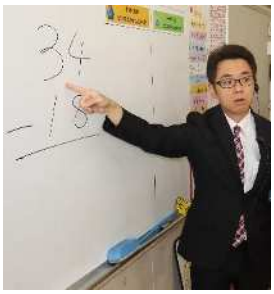
視点１

多様な個が生きる教材化

本単元では、繰り下がりのある引き算の学習に RPG の要素を取り入れることで、子どもたちの学習意欲を高める工夫をしました。
具体的には、10 のまとまりを「ビッグスライム」、1 を「ミニスライム」と名付け、十の位と一の位の概念を視覚的に理解できる構成としました 。
「ミニスライムが 10 匹集まるとビッグスライムになる」というルールを通し、位取りの意味や違いを無理なく理解できるようにしています。例えば、34-8 のような計算では、「4 から 8 は引けないから、ビッグスライムをミニスライム 10 匹に変身させれば引けるよ（14 になるよ)」といったように、実際にスライムを操作しながら計算の仕組みを学びました。
また、全員が同じ「スライム」という具体物を用いて思考する土台を作ったことで、友達と計算方法を共有する際も、操作を示しながら視覚的に説明し合う姿が見られました

視点２

多様な個が生きる教師の立ち位置



単元を通してチーム学習を取り入れることで、分からない時や困った時に互いに助け合う意識を育みました。
教師は、計算方法を理解している子に「スライムを使って説明してみて」と促し、困っている子とつなぐ役割を担いました。
教わる側は、友だちの操作と数字の移り変わりを見ることで理解を深め、教える側も、自分の言葉と操作で説明することで思考を整理し、定着を図ることができました。
また、子ども同士の説明の場面では、教師が「今のところ、分かったかな。」と適宜問いかけ、操作の一つひとつを確認させることで、筆算の手順への理解を確実にしました。
こうした関わりの中で、「困ったら助けてもらう」「困っていたら助ける」という相互の必要感が生まれ、チームとしての強い結びつきが育まれました。

特別支援教育　体育科「体つくり運動　多様な動きをつくる運動～わかばサーキット～」より

視点１　多様な個が生きる教材化

本単元では、本学級の１～６年生の全員でサーキット運動に取り組みました。運動に対する楽しさを味わいながら、多様な動きを発見すること、そして、友達とつながることで、新しい発想を得て、動きの幅を広げようとする学びを目指しました。単元を通し、掲示物を手掛かりに子どもたちが役割をもって「場づくり（準備）」を行えるよう工夫しました。これにより、子どもたちに責任感が生まれ、学習の始まりがスムーズになるという成果が見られました。サーキットのコースには、自然と協力する姿が生まれそうな場の設定にしました。その結果、これまで１人で取り組んでいた子どもも「一緒にタイミングを合わせて跳んでみよう。」「こんな動きはどう？」と他者を求める姿が見られるようになりました。また、「楽しい動きを見付けよう」という共通課題を設定したことで、一人一人が発達段階に応じた「自分なりの楽しい動き」を追究する姿につながりました。

視点２　多様な個が生きる教師の立ち位置

集団の場で子どもが安心して学習に参加し、「やってみたい」という意欲をもつためには教師の適切な関わりが欠かせません。本単元では、複数の教師が各コースに付き、安全面のサポートを行いつつ、子どもの動きを見取る体制をとりました。「今の動きすごいね。どうやってやったの？」と問いかけし、その動きを価値付けることで、子どもは自分の動きを振り返り、自分なりの言葉や身振りで表現するようになりました。教師は子どもが見付けた工夫を肯定するだけでなく、「こんな動きをしている人もいたよ。」と他の子どもに広げる関わりを行いました。また、活動への参加に不安がある子どもには、教師が共に活動することで、安心感を醸成しました。中間交流の場面では、新しい動きを生み出したグループを取り上げました。これにより、他の子どもにも「次はあの動きをやってみよう。」「もっとできるかも。」と意欲的な思考が生まれ、学びの広がりにつながりました。

特別支援科　図画工作　３～６年「クミクミックス」より

視点１　多様な個が生きる教材化

本題材では、自分で考えた切り方・組み方が認められたり、他者から新たな発想を得たりすることで自信をもち、より思いを広げて表現する学びを目指しました。

授業構成としては、前時までに、段ボールの特徴に気付いたり、段ボールカッターの使い方に慣れたりする時間を設けました。これにより、子どもたちは技能を高めて活動の見通しをもつことができ、本時ではすぐに制作に取り組むことができました。

また、環境構成の工夫として、使用する段ボールを「特大・大・中・小」の４サイズに分類して配置しました。これにより、切る手間を省き、自分の使いたい大きさの段ボールを選んですぐに使うことができました。

さらに、友達の様子が自然と目に入る環境にしたことで、「共同作業はありですか。」「友達と一緒につくりたい。」といった声が上がり、子ども同士がつながり合おうという気持ちが自然に生まれました。

視点２　多様な個が生きる教師の立ち位置

前時に、「段ボールをテープや接着剤を使わずに高く積むにはどうしたらよいか」と問うことで、子どもの「困り感」を引き出しました。その過程で子どもたちは段ボールに切り込みを入れて組み合わせる方法を見出しました。制作中は、切り方・組み方を試している様子を見取り、適宜言葉掛けを行いました。どんな思いでつくっているのかを聞き取ったり、次の活動を一緒に考えたりすることで、思考を深めました。

授業の初めには、前時までに出てきた切り方・組み方を実際の作品を基に紹介することで、前時までの活動を思い出し、本時の活動への意欲を高めました。授業の中盤には参考になる技法や、そのよさを全体に広める「のぞき見タイム」を意図的に設定しました。そこで見付けた友達の工夫を次の活動で生かすなど、「方法」でつながり合うことをねらいとしました。これは、他の友達の作品を知る良い機会となり、友達の方法を真似してつくる姿も見られました。